（参考資料）

トークセッションをピックアップ

今回は３日間で８つのトークセッションを実施しました。その一部をご紹介します。
10月２日（月曜日）から11月30日（木曜日）まで、期間限定でアーカイブ映像を公開いたします。
※掲載先　公式サイト（https://creativewell.rekibun.or.jp/）

「文化的『社会的処方』と共創の場」

「文化的処方」の観点から孤独・孤立へのアートの関わりを議論し、誰もがつながりたいときにつながることができるウェルビーイングな社会を作っていくための知見が共有されました。

【登壇者】
伊藤　達矢
（東京藝術大学 特任教授）
稲庭　彩和子
（国立アートリサーチセンター 主任研究員）
中野　敦之
（神奈川県民ホール 館長付 事業課）

【モデレーター】
森　司
（アーツカウンシル東京 事業調整課長）

登壇者の発言要約

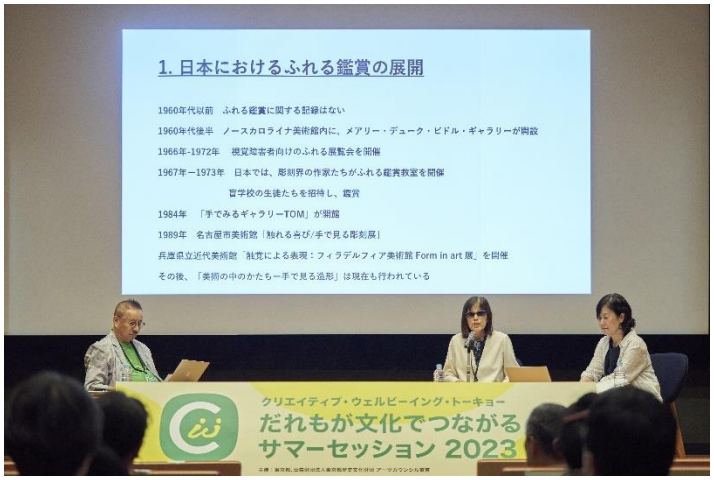
●社会的処方と文化的処方
望まない孤独・孤立など、医療の枠組みでは対処が難しい問題に対し、薬ではなく人のつながりを処方するのが「社会的処方」。これからは、社会の仕組みの外側の、アートやカルチャーによるケアを、「社会的処方」を援用して「文化的処方」という呼び方で推進していきたい。医療や福祉とアートが一緒になって、フィジカルではなくて、心のハピネスを上げていくことで健康にアプローチするというのが「文化的処方」のコンセプト。今、そのための連携の場、共創の拠点作りが始まっています。

●なぜ、孤独・孤立にアートなのか
孤独・孤立は、人とつながることに何かの負荷を感じてつながらないという状態です。アートの良いところは、単純に沢山会話するとか、正面からつながろうとするわけではないところ。作品やアート的な表現を通して、自分自身の内面との対話が起きたり、自分とは違う他者と、何か共通した感覚を感じることでつながりの回路が生まれたりと、とても有機的な形でつながりを作ることができる。ここに、望まない孤独・孤立へのアートの関わりという可能性があります。

●社会とつながる芸術文化・文化施設の在り方
「文化的処方」というと、文化が社会課題を解決できるという印象がありますが、一方で、文化施設は自らが社会とつながっていかなければ社会から見捨てられてしまうという危機感があります。今一度、芸術文化や文化施設が社会や生活の実態とダイレクトにつながって、土台を築いていく必要があるのではないでしょうか。

「ふれることから出会う世界」

イタリアの「オメロ触覚美術館」創設者（視覚障害のある夫婦）を追ったドキュメンタリー映画『手でふれてみる世界』の上映後、作品に触れて鑑賞することの魅力や、インクルーシブな社会の実現に向けた取組などについて議論を交わしました。



【登壇者】
岡野　晃子
（映画『手でふれてみる世界』監督
ヴァンジ彫刻庭園美術館 副館長）
半田　こづえ
（明治学院大学 非常勤講師）

【モデレーター】
茂木　一司
（跡見学園女子大学 教授）

登壇者の発言要約

●オメロ触覚美術館

視覚障害のある方にも美術を鑑賞してほしいという思いから設立された美術館ですが、現在では、見える人も多く訪れる場所になっています。アルド館長は、「触れるというのは、見えないから触れるのではなく、全く異なる美にアクセスすること。触れる鑑賞は、視覚より豊かな、多様な味わいがある。」とおっしゃっています。昨年のICOMのプラハ大会にて、博物館はインクルーシブでなくてはならないということが、定義として明記されました。今、世界中で、博物館を、いかに全ての人たちに開いていくかということを、本当に真剣に考える時期に来ています。

●触れる芸術鑑賞の魅力

多くの美術館では、見ることを前提として展示をしていますが、視覚を重視し過ぎることにより、丁寧に時間をかけて、色んなことを考えながら見ることが疎かになるという弊害が指摘されています。芸術作品に触れることで、ゆっくり深く理解できる特徴の一つが、作品の中に流れる時間です。作品の素材である石や木が過ごしてきた時間。作家が制作する過程で、その素材の前に過ごしてきた時間。そして、完成してから、美術館や倉庫で過ごしてきた時間。作品に触れて鑑賞するということの大きな魅力の一つが、このように「時間を感じる」ということです。

●インクルーシブな社会の実現に向けて

日本の美術館には、視覚障害のある方がほとんど来ない。その問題を、当事者だけではなくみんなで考えていくことが、インクルーシブな取組となり、インクルーシブな社会へとつながっていきます。合意形成に時間がかかりますが、効率や生産性に囚われずゆっくり議論する時間の中で、様々なことが見えてくるし、多様性に向き合う力を訓練することにもなるのではないでしょうか。

「デフリンピックに向けて」

ろう者のお二人を交え、役者たち自身が手話で表現をする「手話能」を題材に、2025年東京開催となるデフリンピックに向けた情報保障や文化プログラムについて議論しました。アクセシビリティの推進や発信力のある文化プログラムの実施について提案をいただきました。

【登壇者】
大杉　豊
（筑波技術大学 教授
国際ろう者スポーツ委員会 副会長）
清水　言一
（喜多能楽堂 館長）

【モデレーター】
江副　悟史
（日本ろう者劇団 代表）

登壇者の発言要約

●ろう者を取り巻く社会情勢とデフリンピックに向けた展望

以前の社会では、手話を言語として認め、ろう者も社会参加しながら共に暮らしていくという考えが広まっていない状況がありました。その後、手話は言語であるという見方が少しずつ広まり、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会では、NHKが手話通訳付きの放送を行うまでになりました。今、情報アクセシビリティが、以前と比べれば着実に進んでいる状況です。デフリンピックを一つのきっかけとして、新しい共生社会の創造に向けた取組を進めていく必要があります。

●パフォーマンスとしての手話

喜多能楽堂では、聞こえる人も聞こえない人も一緒に楽しめる公演を目指してきました。その中で、通常の能を演者以外の人が手話で同時通訳する「手話通訳能」を経て、演者自身が手話表現をしながら演じる「手話能」の公演に至りました。観客からは、とても自然で、手話と通常の能の「型」の区別がつかないという、非常にポジティブな声が聞かれました。「型」で作り上げていく日本の伝統演劇の分野では、情報保障をパフォーマンスとして昇華することができるという、非常に面白い発見でした。デフリンピックでも、このような観点で日本の伝統芸能をアピールできたら面白いかもしれません。

●デフリンピックと文化プログラム

文化施設でも、以前は字幕や文字の説明だけでしたが、現在では手話解説が少しずつ広がっています。2025年のデフリンピックを目指して、あと２年間、皆でできることを少しずつ進めて社会の変革につなげたいと思います。また、様々な国から、ろう者や文化施設の関係者も集まりますので、そこで文化をアピールできるプログラムを東京都にぜひ実施してもらいたいと思います。

トークセッションによる学びを深めるプログラム
その一部の様子をご紹介

トークセッションの内容を深堀りする、様々な展示・ワークショップ等を実施しました。
その一部をご紹介します。詳細は特設サイト（creativewell-session.jp）をご覧ください。

展 示

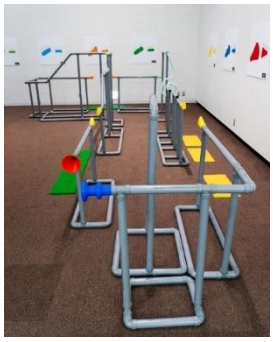
檜皮 一彦
《walkingpractice feat. HIWADROME》

会場一面を埋め尽くした白く光る車椅子に圧倒される作品。多様な知覚や身体感覚、異なる他者とのコミュニケーションについて問いを投げかけました。

西尾 美也
《NISHINARI YOSHIO》

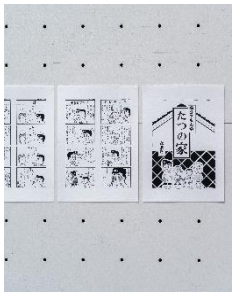
元タンス店を改装して大阪市西成区で展開するkioku手芸館「たんす」の店舗風景を再現。服作りを通して人とつながり、地域にコミュニティができたという「共創」の事例を紹介しました。

たばたはやと・magnet
《TOUCH PARK》



目をつぶり、手の感覚を頼りに進む迷路のような空間や、指先の感覚を使って楽しむゲームの数々。障害の有無に関わらず楽しめる遊具は、バリアフリーの課題を乗り越える一つのヒントになるのでは、という提案となりました。

坂口 環・齋藤 陽道・濵田 慎一郎
《ろう者と表現》


坂口 環

齋藤 陽道

濵田 慎一郎

ろう者のアーティストによる絵画、写真、漫画等を展示。作品を通じて、ろう者の知覚や世界観、コミュニケーションの形に触れることができました。

Photo by Yujiro Ichioka, TAM Inc.

池田 晶紀《はじめてみる》

QDレーザの網膜投影技術による視覚支援機能付きのカメラを使って盲学校の生徒たちが初めて撮影した写真、またその様子を池田氏が収めた写真を展示。「はじめてみる」感動が表現されました。

Photo by Yujiro Ichioka, TAM Inc.

《手で見る絵画》

イタリア北部ボローニャの市内にあるカヴァッツァ盲人施設の美術館「アンテロス美術館」が制作した、絵画の名作を石膏で立体的に表現した作品を展示。来館者が実際に触れながら鑑賞することができました。

ワークショップ

視覚身体言語とコミュニケーション

講師
和田 夏実（めとてラボ）

一人ひとり異なる体験・記憶に基づいて理解する私たちが、どうしたらお互いに「つたえあう」ことができるのか。
障害のある方もない方も一緒に、絵やジェスチャー、手話など伝える方法を見つけながらコミュニケーションを取っていくワークショップ。「つたえたい」と「つたわらない」の間を行き来しながら、それでも行動し、時間をかけてコミュニケーションを重ねていく喜びや豊かさを体験しました。

視覚障害と鑑賞プログラム

講師
白鳥 建二（全盲の美術鑑賞者）

展示会場内の作品をしゃべりながら観るワークショップ。皆で同じ作品を観ながら、お互いに感じたことや想像したことを言葉にしました。新たな作品の観方を体験した参加者からは「自分の中にぱっと浮かんだイメージを声に出してみるのはすごく新鮮だった。言葉に出してみて初めて気付くことがあった」「作品に関して会話する中で、その人のキャラクターや作品との距離感など、人の方に興味が行って面白かった」との感想がありました。

やさしい日本語

講師
金田 智子（学習院大学教授）
稲葉 未希（公益財団法人東京都つながり創生財団多文化共生課）

外国人、子供や高齢者、障害のある方等、あらゆる人とのコミュニケーションに非常に効果的なツールの一つとして取組が広がっている「やさしい日本語」。相手に合わせて自分自身の日本語を「調整」するとはどういうことか。参加者は、「日本のお正月」「自転車に乗るときのルール」等グループごとに与えられたお題について、試行錯誤しながら説明方法を考え、「やさしい日本語を生み出す」体験をしました。